

|         |  |
|---------|--|
| 氏名      | 勝見 巴   |
| ヨミガナ    | カツミ トモエ  |
| 学位の種類   | 博士（音楽）   |
| 学位記番号   | 博音第253号  |
| 学位授与年月日 | 平成27年3月25日   |
| 学位論文等題目 | 〈論文〉 フランシス・プーランク「詩＝音楽」の具体化<br>－歌曲集《画家の仕事》を通して<br>〈演奏〉 《Le Bestiaire ou cortège d'Orphée》（歌曲集《動物小話集あるいはオルフェのお供》）<br>I. Le dromadaire（ひとこぶラクダ）<br>II. La chèvre du Thibet（チベットのヤギ）<br>III. La sauterelle（イナゴ）<br>IV. Le dauphin（イルカ）<br>V. L'écrevisse（ザリガニ）<br>VI. La carpe（コイ）<br>Ce doux petit visage（その優しい小さな顔）<br>Main dominée par le cœur（手は心の意のままに）<br>La grenouillère（ラ・グルヌイエール）<br>《Le travail du peintre》（歌曲集《画家の仕事》）<br>I. Pablo Picasso（パブロ・ピカソ）<br>II. Marc chagall（マルク・シャガール）<br>III. Georges Braque（ジョルジュ・ブラック）<br>IV. Juan Gris（フアン・グリス）<br>V. Paul Klee（パウル・クレー）<br>VI. Joan Miró（ホアン・ミロ）<br>VII. Jacques Villon（ジャック・ヴィヨン） |

論文等審査委員

|      |        |       |        |       |
|------|--------|-------|--------|-------|
| （主査） | 東京藝術大学 | 教授    | （音楽学部） | 永井 和子 |
| （副査） | 東京藝術大学 | 准教授   | （音楽学部） | 菅 英三子 |
| （副査） | 東京藝術大学 | 准教授   | （音楽学部） | 大森 晋輔 |
| （副査） | 東京藝術大学 | 非常勤講師 |        | 太田 朋子 |

（論文内容の要旨）

「暗中模索の作品。鍵が錠前の中で回った。」これはフランシス・プーランク Francis Poulenc（1899-1963）がポール・エリュアール Paul Eluard（1895-1952）の詩に初めて作曲した歌曲集《五つの詩 Cinq poèmes》について語った言葉である。

修士課程において歌曲集《ある日ある夜 Tel jour telle nuit》を研究したことをきっかけに、エリュアールの詩によるプーランクの歌曲作品に興味を持った。とりわけ、歌曲集《画家の仕事 Le travail du peintre》には関心があり、この作品に対しプーランクの「詩＝音楽」という理想がどのように反映されているのか、そして「彼の作品の大きな特色は魅力である」という言葉をきっかけに、エリュアールの詩による歌曲作品の魅力とはどのようなものなのか。それらを明らかにすることが本論文の目的である。

第1章では、プーランクと音楽との出会い、そして周辺環境について述べる。音楽はもちろんのこと、詩と

詩人を愛した作曲家プーランクの原点は芸術を愛した家庭環境や、1900年のパリ万国博覧会開催により国際芸術都市となったパリの熱狂の時代からの影響が多くあるのではと推測したからである。また、エリュアールを始めとした詩人や画家達ともどのような関係があったのかも述べる。プーランクは、もし自分の墓碑銘を刻むなら「アポリネールとエリュアールの音楽家、フランシス・プーランクここに眠る」と記せば最も美しい称号となると思うが、と語っており、プーランクにとってエリュアールは非常に重要な詩人であったのである。そして、プーランクは絵画も愛しており、「私の記憶はすべて視覚的記憶です。」と語るプーランクにとって、絵画への興味もまた作曲に大きな影響を与えているのである。

第2章では、第1章で述べた時代における文学状況とエリュアールについて述べる。第一次世界大戦（1914-1918）により、フランスは激動と混乱の時代を迎えた。戦争体験による作品も多く生み出され、人々の心に訴えかけていった。戦争によって当然ながら人々は不安に陥り、作家達も同じく現実を信じられなくなっていた。このような時代からダダイスムそしてシュルレアリスムが、社会からの影響、社会との関わりによって新しい文学が生まれていったのである。そして、その中に存在した詩人エリュアールはシュルレアリスムの詩人の間で「最大の音楽家」と呼ばれていた。また、激動の時代の中で「芸術」を深く見つめていた詩人であり、プーランクがエリュアールの詩に多く作曲した理由は以上の点にもあるのではないだろうか。

第3章では、プーランクの歌曲創造について述べる。詩と詩人を愛する歌曲作曲家として「詩=音楽」というのは自然なことであった。プーランクは言葉の反復を極力避け、前奏や後奏が長い場合はそこに詩の世界を存分に表しているのである。詩をそして言葉を大切にしている信念の結果であろう。エリュアールの詩に作曲した歌曲作品は、他の作品と比べシリアスな雰囲気があり少々の難解さを感じさせる。しかし、プーランクの歌曲創造において純粋な言葉を紡ぎ出すエリュアールは最高の詩人であったと言えよう。

第4章では、歌曲集《画家の仕事》の分析と演奏解釈を行う。プーランクはこの作品において画家の姿や絵画のイメージまでも存在させていることが明らかとなった。また、言葉に対しても非常に忠実であり、音楽がその情景や空間の広がりまでも生み出していることが窺える。言葉と音楽が融合されており、歌い手は言葉の持つ響きを活かして歌うこと、そして言葉の世界を存分に表している音楽に対し、十分に心を傾けなくてはならない。

以上のことから、プーランクの「詩=音楽」という信念から生み出される音楽は非常に描写的であり立体的なものであるという結論に至った。そして、当然ながらどの歌曲作品に対しても言葉への配慮が見てとれるのであるが、エリュアールの詩による歌曲作品に触れると、エリュアールの詩の持つ静謐さとプーランクの言葉に対する愛情の融合が非常に尊く感じられるのである。残念ながら、《画家の仕事》は日本においては他のプーランク作品に比べるとあまり知られておらず、演奏される機会がまだ少ない。しかし、本論文によってこの作品の特徴と魅力を伝えることができると信じている。そして、演奏家にとっての研究とは、何かを追究すること、何かを提示することだけでなく、それによって演奏家としての自分自身を改めて見つめ、これからの演奏に信念を与えてくれるものであると思う。そこに演奏家にとっての研究の必要性を強く感じるのである。

#### （総合審査結果の要旨）

論文審査会に先立ち学位演奏を第6ホールにて開催。全フランシス・プーランクの歌曲による演奏であった。テンポ設定に疑問の指摘がある曲や、もっと遊びの要素が望まれる意見もあったが、全曲に亘り表情豊かで生き生きとした演奏であった。フランス語がとてもクリアであったことは演奏者のこれまでの研究の成果であり評価に値する。

続いて論文審査及び口述試問を行う。「フランシス・プーランク「詩=音楽」の具体化～歌曲集《画家の仕事》を通して～」と題する本論文は、ポール・エリュアールの詩に作曲したプーランクの歌曲作品の魅力を明らかにすべく追求したものである。第1章でプーランクと音楽の出会い、それを取り巻く環境。第2章で詩人ポール・エリュアールに焦点をあて、その詩に作曲した当時の文学状況について。第3章でプーランクの歌曲創造についてまとめている。続く第4章が申請者の研究の主題となる。学位演奏の軸ともなる歌曲集《画家の仕事》を通して「詩=音楽」というプーランクの信念を明らかにすべく論を展開している。それは描

写的かつ立体的なものであり、そこにこの作品の魅力があると結論を導き出している。またエリュアールの詩の持つ静謐さとプーランクの詩に対する深い敬意を持った作曲の姿勢に演奏家として強い感動を受けている。言葉の響きそのものが音の世界を形成しているとの受け留めである。この第4章の中でピカソ、エリュアールが自らの創造物を自己表現の手段のみに留めていたのではなく、常に現実と向かい合っていた芸術家であったとの見解はこのプーランク研究で重みをもって位置付けられる。

プーランク、エリュアールに対する深い想いや熱意が十分に伝わってくる研究であるが演奏家の立場からのアプローチを打ち出した方がもっと説得力を増す論文になったであろう。また言葉の選び方や文章の不均整、参考文献の引用の仕方や表記の不統一が見られ論文としての体裁を欠いているのは残念である。

演奏、論文双方に於いてプーランクへの熱い想いが自身の個人的世界に深くのめり込んでいるように見受けられる。しかしプーランク作品の魅力解明を真摯に究めた誠意ある論文である。